

# 小学校で英語の授業？

- 2011 年度から施行される新学習指導要領によって、授業時数も増えます。(現行よりも約 10%増) 2009 年度から先行実施できるので、4 月から時数が増える学校が出てくると思います。総授業時間数を見ると 1 年生で年間 68 時間増えます。週 2 時間増える感じですね。
- 週休 2 日制のまま週 2 時間も増えるのだったら、相当負担が増えそうですね。

## 新学習指導要領の各教科の授業時数 ( ) 内は現行

教科	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生
国語	306 (272)	315 (280)	245 (235)	245 (235)	175 (180)	175 (175)
社会			70 (70)	90 (85)	100 (90)	105 (100)
算数	136 (114)	175 (155)	175 (150)	175 (150)	175 (150)	175 (150)
理科			90 (70)	105 (90)	105 (95)	105 (95)
生活	102	105				
音楽	68	70	60	60	50	50
図工	68	70	60	60	50	50
家庭					60	55
体育	102 (90)	105 (90)	105 (90)	105 (90)	90 (90)	90 (90)
道徳	34	35	35	35	35	35
外国語活動					35	35
総合的学習			70 (105)	70 (105)	70 (110)	70 (110)
特別活動	34	35	35	35	35	35
総授業時間数	850 (782)	910 (840)	945 (910)	980 (945)	980 (945)	980 (945)

- 娘が小学校 4 年生なので、小学校の新しい学習指導要領の算数の内容を見たのですが、小学校 4 年生のところにも上の学年からも下からもギョギョッと来ていて、盛りだくさんになっていました。
- もう少し中身の精査が必要だと思います。これとこれを一緒に教えたほうが子どもにとって理解しやすいというようなことが無視されて、学年を隔てて教えるようになってい

る。現場で子どもの状況を見ている先生たちの自由裁量が全くないから、中身を精査することができないのではないか。

- 高校の商業課程の教科書を書いた先生が、「自分で書いたものが文科省に手を入れられて削られてしまう。自分で読んでも意味のわからない内容になってしまっている」と言っていました。私も中学校の歴史の教科書を読んでいて、意味がわからない。前の教科書だと子どもがわからない時に読めば復習できていたのですが、今の教科書は図版が大きくて文章が少ない。少ない文章の中とにかく用語を詰め込んでいる。用語の説明は先生にお任せしますという感じ。



## 小学校から英語教育をやる必要があるのだろうか

- 新学習指導要領では、「外国語活動」が小学 5・6 年生で必修化（週 1 時間）されます。また、中学校では英語の授業数が週 3 時間から週 4 時間へと増加します。どういう目的で導入されるのか。文科省のホームページには、「外国語を通じてコミュニケーション能力の素地を養う」とあります。「コミュニケーション能力の素地」とは、小学校段階で外国語活動を通して養われる、言語や文化に対する体験的な理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみを指したものだ。「小学校の外国語活動は、単に国際理解を図ることを目的とした活動ではなく、中学校の外国語科の学習に接続するものとして位置づけられています」といっているので、これまで総合の時間を使って国際交流・国際理解と言って英語学習をするのとは訳が違います。
- とても語学が堪能な小西克哉さんが TBS ラジオの番組で、小学校での英語教育は必要ないと言っていました。早い時期からはじめるのだったら、継続しなければ意味がない、日常使わないことには身につかないので、きちんと文法をやって文章を書けるようになる時期、中学で始めても十分に合うと。
- 実際に小学校で英語の授業をしたら、誰が教えるのか。そのための特別な先生が配置されるのか。もし担任が英語の授業をしたら、英語の教員免許を持っていない。言語を習得するためにどんなカリキュラムで、どのように教えるのかということ専門

「やればやるほど英語嫌い」

小学校英語活動に異論続々

(2009 年 2 月 23 日朝日新聞)

「先行実施した小学校ではどんどん英語嫌いが増えている」「面白いものをやろうとすれば 1 時間の授業に準備が 4 日かかる」。学習指導要領の改訂に伴い、今春から多くの小学校で始まる高学年の英語活動をめぐり、広島市で開催中の日教組の教育研究全国集会（教研集会）で、そんな報告が学校現場から出た。案が出た当初から「そこまで必要？」と異論が根強い「小学生の英語」。必要な人員も配置されない現状では、実のある内容にするのは無理だ——。参加した教員からは、そんな声が相次いだ。～中略～

東京都の中学教諭は、新入生に英語への意気込みを尋ねた結果を報告。勤務する区の小学校は数年前から英語の授業を実施しているが、「英語は好きじゃない」という子が年を追って増えているという。小学校で内容が理解できないまま終わっているケースが少なくないといい「そんな意識を中学の 3 年間で一掃する英語教育を目指している」と話した。

的に学んでいない小学校の先生が教えることになる。

- 家の子の小学校には今イギリス人の英語指導助手が来ていますが、小・中何校かかけもちの上に、去年から民間委託になりました（龍ヶ崎市）。それまでは教育委員会で採用していたので、アパート代なども全部持っていて、結構な高収入でした。でも全然研修していないんですね。今度民間委託になりましたが、教員の質の問題は依然として残っていると思います。今度は、小学校の先生たちに俄仕立ての研修を費用と労力をかけ行なうのか。いったい何を目指しているのか。グローバル社会に対応できるということを考えているのだとしたら、まず日本語で自分の考えを主張できなければ。それができなければ、いくら英語ができたって何も話せない。
- 国際的な競争に勝つためにという企業の要請に応じて、小学校から英語教育をやる必要があるのだろうか。それに本気でやるのなら、もっとお金と知恵を使って、英語嫌いの子どもを育てないようにしてほしい。でもお金もかけない、先生の配置もしないというのなら、もっと他にやることがあるのではないか。
- どうも今の状況だと英語を教える先生の質は保障できない感じですね。先生だって困惑しますよね。そこで、文科省作成の「英語ノート」という教材が作られる。どのような内容のものかわからないのですが。それを今年度希望する学校に無料配布する。道徳の「心のノート」と同じように、検定を受けないものです。
- 先生方も何もないと困るから配布を希望するでしょうね。
- 「英語ノート」は一般に中身を見ることができるのでしょうか？
- 文科省のホームページで閲覧できたいと思いますが、現時点では見ることはできませんでした。（会報作成時は試作版の目次を見ることができました）でも、先生方や教材会社には情報が行っていると思います。教材会社では英語ノートに準拠したものを作っています。（指導ハンドブック・単語カード・CDなど）
- 外国語活動と言っていますが、英語しか想定していないですね。
- 世の中にはいろんな国の人たちがいて、いろんな言葉があるんだということを小学校の外国語活動の目的だと言いながら、やはり英語に行ってしまうている。
- 今、内田樹さんの『こんな日本でよかったね』という本を読んでいるのですが、その中で『言いたいこと』がまずあって、それが「媒介」としての「言葉」に載せられる、という言語観が学校教育の場では共有されている。だが、この基礎的知見は果たして適切なのか」と疑問を投げかけています。そうではなくて、「言葉」が先にあって、その言葉を使うことで自分の言いたいことがはっきりしてくるのだと。いろいろな言葉を出しながら、「私の言

『「英語が使える日本人」は育つのか？』（岩波ブックレット）も小学校の英語教育について問題提起しています。

一母語と外国語には共通の基盤があり、まず、それを確固たるものにしないと、母語も外国語もあやしくなる。

一日本人が母語能力を保持したままで英語圏の人たちと対等にやり取りできるような能力を、週に数時間の学校教育で身につけられるというなら話は別ですが、それは歴史を見ても無理です。

一（小学校に英語教育の導入することに）どんな人々が主導的に動いているかを考えると、教育産業とそれに関係している学者、それから財界の影響が大きい。

いたかったことはこれじゃない」と感じて、言葉を変えたり、削除したり、加えたりする。そうした作業を通じて自分の言いたいことを確認していく。そのように書いています。もう一箇所引用すると、『教育の現場から繰り返し指摘されているように、外国語というのは母国語習得の後に学べば、母国語を批判的にとらえ返す生産的な契機を提供してくれるが、母国語習得と平行して学ぶと、どちらの国語も不十分にしか運用できない「セミリンガル」を生み出してしまふ』とも書いています。



- 私の職場に、小学校の時ずっと日本にいたというイギリス人がいました。でもしゃべる言葉は小学生の日本語なんです。大人が仕事としてしゃべるとなるとそれなりに自分で磨かなければいけない。言葉の獲得ということを安直に考えてはいけないと思いました。イギリスの日本人学校で教師をしていた時、日本語を書くのにどこに句読点を書くのかがわからない子や、「寒いジュースをちょうだい」という表現をする子がいる。英語でものを考えるようになってきている。どの言語でものを考えてもいいのだけれど、頭の中でしっかりと考える言葉を獲得しないと本人が混乱する。何も急いで中途半端なことをする必要はないと思います。
- 子どもをバイリンガルに育てようという家庭は、ものすごい努力をしているし、失敗している例もある。なかなか難しいこと。そんな難しいことを子どもに課すくらいだったら、自然な育ちの中でしっかりとした一つの言語を頭に入れてから、その後、必要に応じて学んでいけばいい。イギリスの日本人学校の職員会議で、ずっと黙ってばかりいる日本人を見ていたら、英語が話せてもしゃべる中身がなければ黙ったきりですから意味がない。「ご意見は？」と司会の人々が聞くとちゃんと意見を言うんですけどね。現地の人は「自分の意見があるのに、なぜ促されないと言えないのか。子どもっぽいな」という反応をします。
- 小学校 5・6 年生で英語の授業をするために、総合的学習の時間を年間で 40 時間減らしています（110 時間→70 時間）。これまでの総合的学習の時間で、地域に住んでいる外国人に来てもらって、文化的な交流をしていた学校もある。それを削って英語ノートを使った授業をして、いったいどんな力をつけたいのか。
- 私自身もそうだけれど、中学・高校・大学と何年間も英語を勉強してきても、何も身につけていない。大人になってからも語学塾へ通ったけれど、日常的に英語を使う環境も必要性もなく、すぐにやめてしまった。母国語と同じくらい英語をしゃべることができる人を見るとやっぱりうらやましくなるし、コンプレックスも感じてしまう。多くの大人たちにそういうコンプレックスを持っている人が多いのではないか。だから子どもに早い時期から英語教育をさせたいと思ってしまふのだろう。その気持はわからないでもない。でも、教育行政に携わる人や、学校教育の専門家が、保護者たちと同じような情緒的なことで小学校への英語教育の導入を決め

文部科学省のホームページから  
文部科学省では、平成 19 年度から、小学校における英語活動等国際理解活動について指導方法等の確立を図るため、地域の学校のモデルとなる拠点校を全国に 40 校に 1 校程度指定し、ALT や地域人材の効果的な活用も含めた実践的な取組を推進しています。  
平成 20 年度は、全国で 614 校の拠点校を指定し、各拠点校で「英語ノート（試作版）」を活用した取組を進めています。

てもらっては困る。英語教育を専門としている人たちはもっと発言してほしい。

- 現行の中学校・高校での英語教育を何とかしたほうがいいのではないかと思います。
- ブータンという国は、国民全体が英語を話せるようにと力を入れているそうです。
- そういう話を聞くと、日本の政府は日本の国際的な競争力が心配とあせるんでしょうね。
- あせっても、ちゃんとした英語教育ができる先生を外国から連れてくるとか、日本人の英語教員を増やすとか、お金をかけなければみもりのりはないでしょうね。小学校の先生に研修を何時間かして何とかなるような英語の授業をしてもみもりのりはない。



### これからますます地域の人 ボランティアとして入っていく傾向が強まるでしょう

- 小学校に外国人の英語指導助手が来ても、先生たちが会話ができなくて、授業の打ち合わせができなかったと思うんです。ECCの塾の講師をしている親がいて、ボランティアさせてくれと言って、授業のアシスタントをしていました。今は、中学校の英語教員をしていた先生が転任してきて、指導助手とのコミュニケーションが取れているはずですが、それでもその親はボランティアとして授業に入っています。それっておかしいと思います。彼女の善意はわかりませんが、うがった見方をすれば彼女の塾の宣伝になりかねない。授業を作る場に地域の力をとということで非正規に人が入っていくのはおかしくないか。
- 教育は国民の信託を受けて行なうもの。私たちが専門職である教師に、子どもの教育を委託する。それを専門職でない地域の人に委託をしているわけではない。
- 松戸市でも学校支援地域本部制度を立ち上げています。既に小金北中学校区と旭町中学校区で、学校支援地域本部ができています。その地域本部に人材バンクが設置され、授業支援ボランティアや放課後等支援ボランティア、学校施設・環境整備支援ボランティア等、地域の人たちがどんどん学校に入ってくるでしょう。
- こういうやり方をすると、ボランティアとして授業に入れる人があまりいない学校と多くの人が授業に入っていく学校との差が出てきますね。
- ボランティアで授業に入っていく人の質はどう保障する？ 誰でもいいというわけではないでしょう。一方では先生方の教員免許が更新制になるというのに。
- 学校支援地域本部というのは、今後文科省もどんどん進めようとしています。でも、この取り組みはどこの学校でもうまくいくとは限らない。
- 採点・添削までボランティアが入っていく？
- 先生が自分の教え方をチェックするために、自分で採点をするんでしょう。それを人任

#### 【第2次家永訴訟 杉本判決より】

公教育としての学校において直接に教育を担当する者は教師であるから、子どもを教育する親ないし国民の責務は、主として教師を通じて遂行されることになる。この関係は、教師はそれぞれの親の信託を受けて児童、生徒の教育に当たるものと考えられる。したがって、教師は、一方で児童、生徒に対し、児童、生徒の学習する権利を十分に育成する職責をになうとともに、他方で親ないし国民全体の教育意思を受けて教育に当たるべき責務を負うも

せにしたら、子どもたちがどこでつまづいているのかを把握できない。

- 宿題の丸つけをやってくださいというのはよく言われますよ。
- これってプライバシーの問題がありますよね。



### **先生たちが自由に授業を作ることや 仲間と一緒に勉強し合えることが保障されていたら、 もっと学校が変わっていける**

- 学校になぜ今、勢いがいいのか？ それは、先生が自由に授業を作ること、先生同士で勉強し合ってもっといい授業を作ること、何を大事にしていくかを考えて授業を作ること、そういう自由な雰囲気为学校にないから、学校は今停滞しているのだと思う。授業の中身を全部チェックされ、言動をチェックされ、無難に済まそうという先生たちの萎縮が学校の力をなくしている。学校が力をなくしているから、親は何とかしたいとあせって学校へいろいろ言っていく。今、私は私立学校で教員をしているのですが、自由に授業させてくれるんでやりがいがあるんです。先生たちが自由に授業を作ることや仲間と一緒に勉強し合えることが保障されていたら、もっと学校が変わっていけると思います。
- 今、先生たちが専門性を持った自分たちの職業に対して、誇りと自信を持っていないのではないかと危惧しています。地域の人たちが学校に入ってくることを良しとしてしまうのは、専門職としての誇りが持ていないせいではないかと思うのです。その誇りがあれば、「手伝ってもらえるのは嬉しいが、ここまでにしてください」と言えたり、あるいは適切な指示が出せたりするのではないかと思います。
- 病院に地域の人たちが入って行って、医療行為の手伝いをするということは考えられないでしょう。それが、なぜ学校ならOKなのか。
- 先生たちは専門的な教育を受けて、教員免許を取っている。教員免許を持っている専門家として、私たちも信頼して子どもたちの教育をゆだねている。
- 裁判員制度についても同じことが言えますね。裁判官というのは専門職で、ちゃんと勉強してきた人たち。「たんぼぼ」で吉野さんが紹介していますが、読売新聞のコラムに『視力に自信がなくて患者の症状を見逃すのが心配なお医者さんはメガネをかけるだろう。目のいい町内のみなさまに医療知識のイロハを教え、守秘義務の順守を誓わせ、交代で診察を手伝わせるようなことはしない。裁判員制度では、それをする。』と書いてありました。教育だって同じですね。専門職ということをもっと自覚させるような方策を立てないと。
- 教員免許を取った時に、大学の先生に「免許を取ったから専門職になるのではない。スタートラインに立てる資格が持てただけ。自分が勉強していかないと専門職にはなれない」と言われました。ですから研究会に入って他の人の実践を聞いたりしました。組合や民間の研究団体などに入って、もっと自分で研修していくということをも、専門職として自分に課してほしいと思います。
- 仲間同士の雑談などで互いの取り組みの事例を話し合うということも勉強の一つ。今はその雑談さえするゆとりが先生にないのではないか。
- 専門職だからと言って、かえって自分一人で固まってしまって、他の先生の誇りを傷つ

けないようにと、あたらず触らずというふうになってしまうこともある。職場で切磋琢磨できるという先生になかなか出会わなくて。でもたまたま東京の中学校を退職した先生と一緒に組んで3年間仕事をすることができましたが、自分で作った教材を見てもらって、手直しをしてもらうとグンと良くなるんです。日々授業について話し合えるということが、日常の中で支えてくれる先輩がいることが、とても大事だと思います。

- 犬山市では先生の間僚性を重視していて、学校内で互いに研修しあうことを教育施策として打ち出していました。やるべきはこういうことだと思うし、これをやるのにそれほどお金はかからないですね。
- 今、気になっているのですが、障害のある子どもが途中から特学へ変更することが2年続けて二人いました。先生に「将来のことを考えたらそちらの方がいいのではないか」と声かけられて。入学する時に親が選ぶのなら仕方がないけど、1年生の時から普通学級で皆と一緒に学んで来て、なぜ途中から放り出すのか？ 疑問に思う。
- 国立市でも、ちょっと手がかかる子どもを特殊学級へ入れてしまう事例が多くなっているという話を読みました。
- 効率よく教育を進めたいということでしょうか。
- 今年の小学校の入学説明会で、校長から「一律にできるように準備しておいてください。ある程度読み書きができるレベルまでにして小学校へ来させて下さい」と言われたそうです。
- 今から20年前、長男が小学校に入学する時は、「自分の名前が読めれば十分です。後は入学してからちゃんとやりますから大丈夫ですよ」と言われました。
- 一種の教育放棄ではないですか。家庭に学校教育を押し付けていることになりませんか。
- こんなに学校教育に親が出る幕が多いとは思っていませんでした。家庭のありようによって、子どものできるできないがとても固定化されると感じます。
- どんな家庭に育っていても、公立学校へ行けばちゃんと卒業する時には一人前の人として育ちあがって、社会へ出て行けると思っていました。
- 先日、本田由紀さんの『家庭教育の隘路』という本を読んだのですが、日本は家庭教育に依存しているところが非常に強い、そういう中で今、ますます家庭教育で何とかしろという傾向が強くなっていて、そうなればそうなほど格差が固定化してくる。だからこそ公教育がきちんと保障しなければならない。そういうことが書かれています。